

## 銅鐸・武器形青銅器の埋納状態に関する一考察

One Consideration about the State That the Bronze Bell-Shaped Vessel / Weapon Type Bronze Ware Was Buried

石橋茂登  
ISHIBASHI Shigeto

要旨 弥生青銅祭器の埋置状態について、武器形青銅器は横倒しで、刃を立てた例が多数ある。銅鐸では横倒しで鰭を上下に立てる不自然な状態が多い。銅鐸の埋置方法に思想的背景を読む見解もあるが、両者の青銅祭器を総合的に解釈することはできないものだろうか。

武器形青銅器の埋納は北部九州ではなく、より東の地域で始まったらしいと考えられている。そして中国四国地域は武器形青銅器と銅鐸を併用する地域でもある。ならば銅鐸と武器形青銅器の埋置状態に共通性があってもよかろう。荒神谷遺跡では銅矛や銅剣を置くように銅鐸も横たえ、刃、鰭を上下に立てる。多くの事例でも銅鐸と武器形青銅器は一つの埋納坑に埋められ、一括で取り扱われている。そのような祭祀を行う中で、武器形青銅器とおなじ埋置状態が銅鐸に当てはめられたとしても何ら不思議はないだろう。それが扁平鈕式新段階から突線鈕式にかけて東へ伝播した可能性を考えたい。

はじめに

弥生時代の青銅器である銅鐸と武器形青銅器について、どのような状態で出土したか、言い換えればどのように埋められていたのかが判る事例が、近年増加している。

本稿では銅鐸・武器形青銅器が埋められている状態、すなわち横倒しで鰭上下とか、倒立状態、平置きなどといった、意図的に埋められた器物の状態を埋置状態と呼ぼう。銅鐸では横倒しで鰭を上下に立てる埋置状態が多く知られている。このような埋置状態にはどのような意味があるかは研究者の関心をあつめ、学説として結実している。

しかし、青銅器に込められた思想的内容の推測はひとまず置いておこう。筆者が持つ関心は、横位・鰭上下という不自然な銅鐸の埋置状態は、果たして銅鐸祭祀において自発的に形成されたものだろうか、それとも武器形青銅器を用いた祭祀とも通じる普遍的な要素が何かあるのだろうか、という点である。すなわち、銅鐸のための何らかの思想・理論によってこの状態で埋めることが選択されているのか、それとも別の要因があってこのような埋置状態が広まったのかということである。

そこで本稿では、近年の調査事例を中心として弥生青銅器の埋納状態を検討し、埋置状態についていくつか考えてみたい。

### 1 埋納状態に関する諸説

弥生青銅器祭祀の解釈としては諸説あり、岩永省三<sup>1)</sup>が簡潔に整理・批判しているので詳細は繰り返さないが、それを参考に整理すると以下ようになる。銅鐸は農耕祭祀に関わるとする説が広く受け入れられている。武器形青銅器は武威を崇拝し悪霊や外的の鎮圧・防御

をはかったとみる説が有力といわれ、農耕祭祀に関わるとする説、航海に関わるとする説などがある。

銅鐸が埋まっている理由には多くの解釈があり、埋める行為が祭祀ではないとみる説では用済み後の廃棄、隠匿、複数なら交易品の貯蔵、多数ならムラの政治的統合に関する集積、配布のための集積などがある。祭祀による埋納とみる説では土中保管、俗界からの隔離、奉獻・供犠、境界守護などがある。土中保管説をさらに進め、地霊・穀霊の依り代を大地に納めておくことが大切だったとする説もある。銅鐸を畿内大社会の結界として埋めたという説もある。しかし岩永が指摘するとおり、埋置方法や立地が広域で共通することから、単なる廃棄や隠匿はありえず、複数埋納の多くはほぼ同時期のものをまとめていることから祭祀の効果を上げるために数を増やしているのだという解釈が妥当である。

佐原真は銅鐸の土中保管説を採っていた。武器形青銅器では福岡県重留遺跡で複数回の埋納が報告され、寺福童遺跡でも先の埋納があった可能性が報告されており、土中保管説に有利な状況である。しかし近年は目的を持って銅鐸を埋納したという説が敷衍し、銅鐸の土中保管説は下火である。

銅鐸が横位・鰭上下で埋置されることに関して、寺沢薫は銅鐸埋納を論じた際<sup>2)</sup>、出土状況の伝聞資料なども加えて集計し、鰭垂直と水平が個体数で48%と30%（埋納遺跡件数で41%と38%）であり、「銅鐸は鰭を垂直にたてるか、水平に寝かすかのいずれかの方法によって埋納するという大方の原則があったと考えられよう」と述べている。しかし発掘に拠らない情報の確実性の問題はおくとして、古い銅鐸も新しい銅鐸も一括して集計し、埋置方法が時期によって変わった可能性を検討していない。これは寺沢が銅鐸埋納を外縁付鈕式・扁平鈕式の埋納を第IV様式末、突線鈕式以降は第VI様式～庄内式古段階平行期にピークがあるという2大画期を考えると関係するだろう<sup>3)</sup>。また寺沢薫は銅鐸の二面性を重視している<sup>4)</sup>。多くの銅鐸で両面の文様がわずかに異なっており、それを意図的に文様を変えたとみて「銅鐸は鰭を境にして二つの面を分かち、別々の世界を表現した呪器なのだ」という。「春から秋にかけての辟邪の役割と、秋から春にかけての呪縛の役割を期待された」のであり、横位・鰭上下の埋置はこの二面性を反映しているというのである。武器形青銅器が刃を立てる理由も同様に考えているらしい。

銅鐸が横位・鰭上下で埋置されることに宗教的意義を見いだそうとしているのが、銅鐸論の特徴と言えるかもしれない。しかし寺沢薫の論は、横位・鰭上下の埋置方法が宗教的理由によって創り出されたもので、何らかの思想を反映しているはずだという前提があるように思われる。はたしてそうだろうか。多くの銅鐸の表裏面で文様が一部異なっていることも、事実としては確かにそうである。しかし同一工人（系統）の作と考えられる銅鐸でも、一鐸ごとに少しずつ文様が異なっている。たとえば加茂岩倉遺跡の銅鐸のうち18・23・35号鐸はシカ・四足獣などを配し他にない特徴があることから出雲産の可能性も言われる銅鐸群だが、23号鐸が鋸歯文の割り付けについても最も整然としている。つまり絵画の違いだけでなく、割り付けにも違いがある。だからと言って、このような個体差が異なる世界や宗教的意義を表していると読み取る説は寡聞にして聞かない。銅鐸の表裏で多少文様が異なることも、個体差にちかい面ごとの作品差とでもいうべきものにすぎない可能性があろう。また武器形青銅器が刃を立てる理由を二面性で解釈しようとする、表裏で文様が異なっていないかという疑問がある。もちろん二面性を表している可能性もあり、結局このような

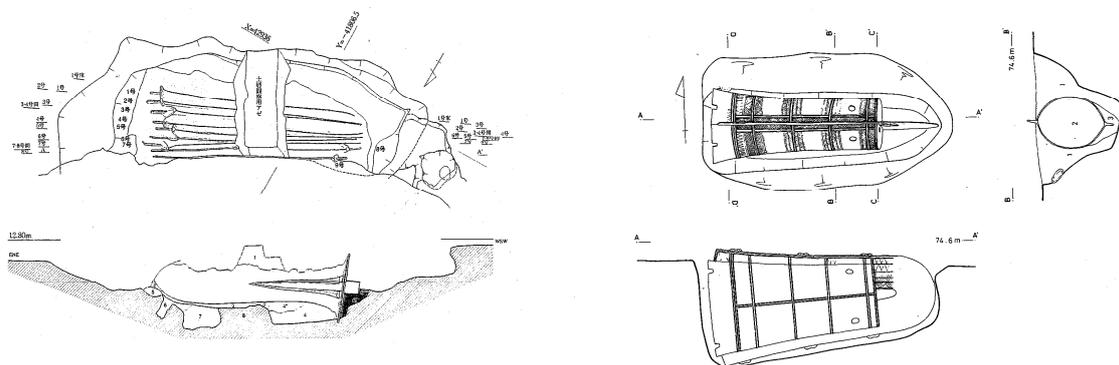


図1 福岡県寺福童遺跡 銅戈（左）と静岡県前原Ⅷ遺跡銅鐔埋納坑

観念的な側面は肯定も否定も難しい。

このほかには武器形青銅器の刃を立てて横位で埋置することの意義を積極的に考察した論考はあまり見られないようだ。吉田広<sup>5)</sup>は原則的に平形銅剣が水平に置かれることを指摘し、棘状突起が発達した平形銅剣の形態が一因と推定している。他の武器形青銅器では刃を立てることで水平埋置より多くを納めることができるが、単体でも刃を立てた垂直埋置を志向することから、刃を立てることに「埋納という行為にあたっての、強い意志の発現をやはり読み取らねばなるまい。」としている。それ以上思想的側面には踏み込んでいない。

石川日出志<sup>6)</sup>は従来各種ある論を含み込む形で解釈している。銅鐔が居住域でも墓域でも、集落の中でも外でも、あるいは単数埋納・多数埋納にかかわらず、埋納方法に定まった方式があるとみられることから、銅鐔が農耕祭祀に使われたとしても、最終的には一定の方式によって何らかの目的で埋納されたとみる。銅鐔が豊穡と生命の象徴であるとすれば、それを埋めるのであるから地霊を鎮める役割を考えると理解しやすいとし、埋納が集落域内ならムラの存続・安寧、ムラの境界である山あいには埋められていけば悪霊や危害を防ぎ、墓域では祖霊への危害を防ぐなどが意図されたのではないかと推測している。石川は土中保管説はとらない。目的が多様だったと考えるのは、多彩な出土状況を理解するためには合理的といえよう。一方で石川は荒神谷遺跡をめぐって、中期初頭または中頃から中期末にかけて100年以上にわたり北部九州・近畿から青銅器を入手して儀礼を繰り返していたものが中期末に埋納されたこととみており、長期間埋められずに保持されてきた青銅器が、あるときに埋納されるという理解を示した。銅鐔の埋納そのものが何らかの目的のために行われた、と考える場合、長期間使用されていたものをある契機に伝世を打ち切って埋納することになる。「長期間使用されていたときの銅鐔の役割」と「ある目的のために埋められる銅鐔の役割」を整合的に説明する必要がある。

要するに諸説あるが、銅鐔と武器形青銅器の埋納方法が類似する理由を説明し、両者を統一的に説明できる論はまだない、と言って良い。

## 2 埋納状態の事例

まず武器形青銅器と銅鐔のうち、出土状態がある程度判明しており、埋納と考えられるものを列記しよう<sup>7)</sup>。なお銅鐔はすべて埋納で副葬例はないとされており、ここでは埋納状態のわかるもののうちの特徴的なものを中心とした。

- 福岡県福岡市西区下山門字敷町 中細形銅戈 3 口。包含層にピットを掘って埋める。
- 福岡県春日市岡本辻 広形銅矛 9 口。地表下 5-6 寸に石 1 個、その 1 尺 5-6 寸下に刃を打ち違えて密接したまま埋没していた。
- 福岡県春日市小倉西方 中広形銅矛 9 口。1m×0.4m、深さ 0.3mほどのピットに納められていた。
- 福岡県春日市原町 3 丁目 中細形と中広形の銅戈 48 口。茎と鋒を交互に並べ、刃を立てた状態で埋納されていた。
- 福岡県筑紫郡那珂川町安德原田 広形銅矛 12 口。地下 2.5 尺に 12 口まとめて、刃を互い違いにして横に並べてあった。
- 福岡県小郡市乙隈東畑 中広形銅戈 2 口。地表下 60cm に 20cm 間隔で水平に置かれていた。
- 福岡県浮羽郡吉井町つるかけ 中広形銅矛 3 口。三枚重ねて地中にあり。
- 福岡県浮羽郡吉井町徳丸堂の前 中広形銅戈 2 口。地下げ中 2 口重なって出土した。
- 福岡県糸島郡二丈町深江井牟田 中国式銅剣 1 口。約 50cm 四方の土坑に埋納されていた。
- 福岡県筑前町三並ヒエデ遺跡 銅戈 17 口が筒型土器に入った状態で埋納と復元されている。
- 福岡県筑紫野市隈・西小田第 7 地点 中細形銅戈 23 口。鋒を交互に組み合わせて埋納と推定。銅戈容器らしき土器も出土した。
- 福岡県浮羽郡日永 広形銅矛 1 口、広形銅戈 1 口。1m×25 cm、深さ 15 cm の土坑に鋒をそろえ刃を立てた状態で埋納されていた。
- 福岡県田川郡糸田町古賀ノ峰遺跡 中細形銅戈 5 口。刃を立てて鋒をずらして同一方向にそろえて埋置されていたと復元されている。
- 福岡県北九州市小倉南区重留遺跡 広形銅矛 1 口。後期中頃～後半の竪穴住居内の土坑に埋納。刃を立てた状態。複数回の埋納痕跡あり。
- 福岡県小郡市寺福童遺跡 中広形銅戈 9 口。刃を立てて鋒を揃える 7 口と、同じく鋒を反対にして揃える 2 口を並べ揃えて埋置する。埋土中に青銅器片があったことから先行する埋納があったと考えられている<sup>8)</sup>。
- 佐賀県神埼郡吉野ヶ里遺跡 中広形銅戈 1 口。48 cm×24 cm の土坑に刃を水平に埋納。後期前半以降とされる。
- 佐賀県三養基郡みやき町検見谷遺跡 中広形銅矛 12 口。1・2 号と 3～12 号は分かれる。1.5 m×1.3m の土坑に刃を立てて耳を上にして鋒を互い違いにして埋納と推定復元されている。10 口に研ぎ分けあり。
- 佐賀県鳥栖市江島町本行 中広形銅矛 1 口。長楕円形の土坑に刃を立てて埋納されていた。
- 長崎県対馬市上県町佐護クビル 広形銅矛 3 口、中広形銅矛 1 口。石蓋をもった石槨内に朝鮮系陶質土器などとともに納められていた。宗教的な特殊埋納遺構ともいわれる。
- 長崎県対馬市峰町三根ガヤノキ E 地点 中広形銅矛 1 口。石蓋土坑（特殊埋納遺構）。鉄剣、鉄刀、ガラス小玉などと共伴。
- 長崎県対馬市豊玉町大綱 中広形銅矛 11 口。狭い谷の東向き斜面に鋒を互い違いし箱に収めたかのような状態で埋納。その下と上に石があったという。
- 長崎県対馬市豊玉町佐保シゲノダン 深樋式銅剣 1 口、中広形銅矛 1。埋蔵土坑。十字形柄頭金具などと共伴した。
- 長崎県対馬市豊玉町佐志賀黒島 広形銅矛 15 口。地下 2 尺から、目立った施設はなく、た

だ並列にあったという。

熊本県熊本市植木町今古閑 中細形銅矛4口。竪穴住居内の高床に4口並べてあった。

大分県宇佐郡安心院町且尾谷迫 中広形銅矛7口。7口まとめて埋納されていたが詳細不明。

大分県大分市浜 中細形銅剣4口。鋒重ね。方2mほどの縦穴に納められていた可能性あり。

大分県宇佐市川部 細形銅剣鋒。祭祀土坑から出土した。

島根県簸川郡斐川町荒神谷遺跡 銅鐸6口（菱環鈕式1口、外縁付鈕1式5口）と銅矛16口（中細a2口、中広a2口、中広b12口）が一括埋納されていた。隣地に中細形c銅剣358口の埋納坑もあった。銅鐸は横位、鱗上下で鈕をつきあわせるようにして3口づつを2列で並べていた。銅矛は刃を立てて横位に置く。佐賀県検見谷遺跡の中広形銅矛と類似した研ぎ分けがあり、銅矛の埋置状態もよく似る。

島根県加茂市倉倉遺跡 銅鐸39口（外縁付鈕1式19口、外縁付鈕2式9口、外縁付鈕2式～扁平鈕1式2口、扁平鈕2式6口、扁平鈕2式～突線鈕1式3口）の一括埋納。谷の奥まった位置にある斜面中腹に土坑を掘削し、銅鐸を横位・鱗上下の状態で見えていた。さらに中型銅鐸の中に小型銅鐸を丸ごと入れ込む、入れ子の状態であった。それまで滋賀県大岩山などで入れ子状態の埋納があることは知られていたが、確実な調査例は初めてである。また大岩山の銅鐸では入れ子といっても鈕を入れるくらいだが、ここでは良く大きさが揃った小型銅鐸を中型銅鐸に丸ごと整然と納めていた。入れ子で組み合わせるために意図的に大きさを揃えたと考えられる。

島根県出雲市大社町真名井遺跡 中細形銅戈1口。大石の下から。

島根県松江市鹿島町佐陀本郷志谷奥遺跡 中細形銅剣6口、外縁付鈕式銅鐸1口、扁平鈕式銅鐸1口。埋納坑中に納める。1号鐸が鈕を斜め上、2号鐸が鈕を斜め下にし、銅剣は立てかけるようにおかれたと復元される。

広島県広島市木の宗山 山腹の巨石の下から、福田型銅鐸1口と中細形b銅剣1口・中細形b銅戈1口。安井良三は本例などから銅鐸を航海に関わる民の祭祀としての埋納を考え、船を航行させる時の「山だて」「山あて」に使われる「山のまつり」に使ったと推測した<sup>9)</sup>。

岡山県岡山市高塚遺跡 突線鈕式銅鐸1口が埋納坑に横位・鱗上下で埋置されていた。銅鐸より一回り大きい73cm×43cm、深さ40cmほどの土坑を掘り、底面に周囲の土とは異なる土を土坑底に敷き、鱗上下の状態で見えていた。埋納時期は弥生時代後期初頭以降。

岡山県井原市下稲木町兼安明見 扁平鈕式銅鐸1口が55cm×35cm、深さ35cmほどの土坑に横位・鱗上下で埋置されていた。銅鐸には朱がみられた。

岡山県倉敷市瑜珈山 銅剣5口を山の斜面に揃えて埋めてあったという。平形銅剣4口と現存しない1口からなる。

岡山県岡山市中区雄町 扁平鈕式銅鐸。鱗を水平にして土坑に埋置されていた。

香川県善通寺市瓦谷 中細c銅矛1口、銅剣7口（中細b1口、中細c3口、平形I2口、中細形1口）。地下2尺に束にして埋没していた。

香川県善通寺市有岡南原麻坂 7口の平形銅剣と推測される。表土より4尺下で束となって出土した。

香川県さぬき市寒川町石田東・森弘 平形銅剣3口。土中に三枚重ねて埋めてあった。

香川県善通寺市与北町陣山 平形銅剣3口。互い違いに水平埋置されていたと復元される。

愛媛県西条市福成寺天神谷 平形銅剣6口。地下1.5mに平らに積み重なる。

愛媛県松山市祝谷六丁場遺跡 平形銅剣1口。推定長67cm×推定幅28cm、深さ17cmの長楕円形土坑に埋納されていた。

愛媛県四国中央市土居町 細形銅剣2口以上、7口か。埋納土坑から出土した。

高知県高岡郡四万十町作屋西ノ川口 中広形銅矛1口、広形銅矛4口。袋状埋納ピット。

高知県南国市十市遅倉 中広形銅矛1口。袋状埋納ピット。

徳島県徳島市名東遺跡 扁平鈕式6区画袈裟襷文銅鐸1口が方形周溝墓群の一角にある土坑から出土。方形周溝墓と埋納坑の時間関係は不明。横位・鱗上下で埋置されていた。銅鐸より一回り大きい60cm×35cm、深さ30cmほどの土坑を掘り、底面に厚さ5cmほどの土を敷き、土坑を掘った土を埋め戻すように埋め、土坑底面や敷いた土よりもかなり上位に、鱗上下の状態に銅鐸を据える。銅鐸を巻くように認められた土は、最後に入れたとされている。また、全ての埋土に炭が入っており、埋納のまつりに関わると推測されている。銅鐸には朱が残っていた。

徳島県徳島市矢野遺跡 突線鈕5式近畿式銅鐸1口。弥生時代集落の中に埋納坑があった。横位・鱗上下で埋置。銅鐸より大きな、137cm×61cm、深さ30cmほどの略方形の土坑を掘り、土坑底に置き土をし、鱗上下で銅鐸を置く。埋納手順は土で2回に分けて包んだか、箱のような容器に収めたかという方法が推定されるが、後者の可能性が高いとされる。また埋納坑を囲むピット7基も検出され、覆屋のようなものと考えられる。

徳島県源田遺跡 開墾中に銅鐸3口（突線鈕1式1口、扁平鈕式2口）と細形銅剣1口発見。1号銅鐸は鈕を下にした倒立状態、その横に銅剣、そのやや斜め下に倒立状態で2号銅鐸があり、3号銅鐸は表採のため詳細不明である。3号銅鐸は内外に朱が塗布されていた。細形銅剣は長さ54.3cmの長大なもので、平形銅剣への過渡的なものとも言われる。銅剣と銅鐸の併用であることと、倒立での埋置状態であることが特徴的である。

香川県観音寺市古川町南下 外縁付鈕2式銅鐸1口。横位・鱗上下で埋まっていた。

兵庫県水上郡春日野町野々間 外縁付鈕2式銅鐸1口、扁平鈕式1口。埋納坑より出土。1号は直立、2号は離れて鱗水平だった。

大阪府箕面市如意谷 突線鈕3式近畿式。横位・鱗上下で埋まっていた。

大阪府羽曳野市西浦 突線鈕4式近畿式銅鐸1口。横位、鱗上下で埋置（鱗は斜めに傾いていた）。

大阪府堺市下田遺跡 扁平鈕式古段階の銅鐸1口が発掘調査で出土。横位・鱗上下で埋置。時期は弥生中期～古墳前期。河道の岸に掘られたものか。

大阪府八尾市跡部遺跡 扁平鈕式古段階の銅鐸1口が発掘調査で出土。鱗上下・横位で埋置。埋められた時期は弥生時代中期から終末期の間とされる。大きな略方形の土坑を掘り、中央の銅鐸を据える部分だけ別の土を置く。その土に突き立てるように鱗上下に据える。

兵庫県神戸市桜ヶ丘 銅鐸14口（外縁付鈕式4口、扁平鈕式10口）、大阪湾型銅戈7口。大半が横位・鱗上下で埋納坑に納められていたと考えられる。

兵庫県神戸市本山 扁平鈕式銅鐸1口。埋納坑に横位で納める。鱗は斜めだが、本来鱗上下と考えられる。

京都府木津川市相楽山 扁平鈕式銅鐸1口。横位・鱗水平らしい。

奈良県桜井市大福遺跡 突線鈕1式銅鐸1口が方形周溝墓の周溝が切れる部分の肩に沿わせて掘られた埋納坑に納められていたことから、方形周溝墓の入り口にあたる部分に意図的に

埋められたと解釈されている<sup>10)</sup>。埋められた時期は弥生時代後期の中期から古墳時代前期の初めころの間だという。銅鐸は個人所有物ではないと言われているが、方形周溝墓と銅鐸の関係は愛知県朝日遺跡でも伺え、重要な問題点といえよう。埋納状態は鱗上下、銅鐸より一回り大きいだけの土坑に納める。土坑底は水平ではなく、鈕側が浅くなっており、銅鐸を据えた時に鐸身全体がほぼ水平になるよう配慮されている。土坑の横断面形も中央が尖っていて鱗を据えやすい形に見える。

和歌山県日高郡日高町荊木向山銅鐸 突線鈕3式近畿式銅鐸2口。1号鐸と2号鐸は鱗を立てて互いに並べて出土したとされる。

和歌山県御坊市湯川町丸山亀山 小型の扁平鈕式である亀山型銅鐸3口。1号鐸と3号鐸が並び、その上に2号鐸を置いた俵積みのような状況とされる。

和歌山県田辺市中芳養平ヶ峯 扁平鈕式銅鐸1口。鱗を立てて埋納とされる。

和歌山県有田市山地 大阪湾型銅戈6口が鋒と内を交互に三口ずつ重ねてあった。南方から銅鐸も出土した(現存せず)。

和歌山県日高郡みなべ町大久保 突線鈕5式近畿式銅鐸1口。横位・鱗上下で埋置されていた。

和歌山県日高郡日高町荊木 突線鈕3式近畿式銅鐸2口。横位・鱗上下で鈕を互い違いに置かれていた。

三重県伊賀市柏尾湯舟 突線鈕4式近畿式銅鐸1口。地下2尺に横位・鱗上下で埋置。鐸の下に石があった。

近江 滋賀県大岩山 明治14年(1881)に3口がまず見付き、直後に11口を掘り出した。その状況は「唐金古器物三個入子ノ如クニシテ土中ヨリ發見仕候」とある。そこで竹で「掘立候處同品二三個土中ニ相見へ候得共」、そのままに帰り、翌日残りの11口を掘り出した。その時には「凡三尺餘モ穿チ候處土中ニ該品横ニ並べ有之候」と記録されている<sup>11)</sup>。少なくとも3口が入れ子であったことが確実である。また鱗上下かどうかは不明だが、横たえて並べられていたことも判る。入れ子が3口以上だったのか、3口一組だったのかは記録からはわからない。同じく滋賀県大岩山から昭和37年(1962)、銅鐸9口と、離れて1口が発見された。これも工事中の不時発見のため詳細は不明だが、3口一組の入れ子が3組あり、明治14年の発見と似た状況とみられる。

大岩山は近接する3地点から計24口の銅鐸が発見された注目すべき事例である。明治出土が突線鈕1~5式で3式が大半を占め、昭和出土が突線鈕1~3式で構成される。昭和出土の一群のほうが比較的古い様相とも言えるが、どちらも複数の型式から成り、かつ近畿式と三遠式を含んでいることが注意される。

愛知県一宮市八王子遺跡 外縁付鈕式銅鐸1口。集落内で倒立状態で埋納されていた。

愛知県清須市朝日遺跡 突線鈕1式銅鐸1口。方形周溝墓群の一角に埋納坑があった。横位・鱗上下で埋置されていた。

愛知県豊川市伊奈 突線鈕3式三遠式銅鐸1口、突線鈕4式三遠式2口。横位・鱗上下で埋置と復元されている。

愛知県豊田市手呂 突線鈕3式三遠式銅鐸1口。傷から横位・鱗上下で埋置されていたとみられる。

愛知県渥美郡田原町堀山田 突線鈕4式近畿式銅鐸1口。土坑中に横たえて埋納という。

静岡県浜松市木船 突線鈕 3 式三遠式銅鐸 2 口。横位で鱗を水平に、ともに鈕を北にして並んでいたという。

静岡県浜松市北区三ヶ日町猪久保 突線鈕 4 式近畿式銅鐸 1 口。埋納坑に横位・鱗上下で埋置されていた<sup>12)</sup>。

静岡県磐田市敷地 1・2 号鐸 突線鈕 3 式三遠式銅鐸 2 口。横位・鱗上下ではなく「鱗を左右にして水平の位置に上下二個積み重なってあった」とされ<sup>13)</sup>、具体的な記述であるが発掘から 35 年ほど経過してからの聞き取りであることと、現地がかなりの傾斜面で本来の状態かどうか判りかねる要素がある。近年隣接地から出土した敷地 3 号（突線鈕 3 式三遠式）は埋納坑に横位・鱗上下で埋置されていた。

静岡県磐田市敷地 3 号鐸 突線鈕 3 式三遠式銅鐸 1 口。埋納坑に横位・鱗上下で埋置されていた。

静岡県浜松市都田前原Ⅷ遺跡 突線鈕 2 式三遠式銅鐸 1 口。埋納坑に横位・鱗上下で埋置されていた。

静岡県引佐郡細江町滝峯才四郎谷 突線鈕 3 式近畿式銅鐸 1 口。埋納坑に横位・鱗上下で埋置されていた。

長野県中野市柳沢遺跡 銅戈 8 口、銅鐸 5 口。大阪湾型銅戈 6 口と九州形銅戈 1 口が刃を立て並べ、銅鐸は外縁付鈕式 1 式と 2 式を含むとされる。

長野県塩尻市柴宮 突線鈕 3 式三遠式銅鐸 1 口。横位・鱗上下で埋置されていた。

上記が、埋まっていた状況がある程度わかり、埋納と考え得る主な例である。これらを概観すると、武器形青銅器を束ねて地下に納める例は香川に多い。袋状ピットは高知にみられる。平形銅剣は吉田広が指摘する通り、刃を立てずに平置きすることが特徴的である。

石の下から出土したとされるものがいくつかあるが、そのほかにも、巨石の下などから出土したとされる以下のような事例がある。上記と合わせて列記する。

長崎県対馬市豊玉町佐志賀宮鹿之島 広形銅矛 1 口。大きな一枚石の下から。このほか、対馬には石取りの際に石の下から出土したとされるものがあるが、埋葬施設かどうか不明。

島根県出雲市大社町真名井遺跡 中細形銅戈 1 口。大石の下から。

広島県広島市木の宗山 山腹の巨石の下から、福田型銅鐸 1 口と中細 b 銅剣 1 口・中細 b 銅戈 1 口。

広島県府中市盾石 大石の裂目の小空隙から深樋式銅剣 1 口。石棺の可能性も。

広島県尾道市大峰山 石切作業中、石の下から中細 b 銅剣 2 口、中細 b 銅矛 1 口。

広島県沼隈郡中山南森迫 山腹の巨大な立石の前か。平形銅剣 2 口。

広島県福山市奈良木大迫 巨大な岩肌の露出した下。中細形銅矛（鋒）。

岡山県岡山市飽浦 畑中の大石の下から、細形銅剣 1 口と中国式銅剣を加工したもの 1 口が出土した。

香川県観音寺市藤ノ谷 累積する石積みの下（石積みが本来のものか不明）、3 口重なって出土。細形銅剣 3 口。

香川県三豊郡上高瀬北条 自然石を 50-60 cm 盛り上げた中。平形銅剣 3 口。

香川県仲多度郡まんのう町長尾佐岡 大岩石陰に埋められていた。平形銅剣 2 口がほぼ同方向に重ねて水平に置かれる。

香川県さぬき市津田町北山北峰神社後方 山頂の岩石中に置かれていた。型式不明3口。  
 香川県小豆郡内海町安田 大きな石の下。平形銅剣2口、扁平鈕式銅鐸1口。  
 愛媛県四国中央市土居町津根西森立石 大石の下に横たえられていた。中広形銅矛1口。  
 和歌山県新宮市神倉山ゴトビキ岩 扁平鈕式銅鐸1口。経塚遺物と混在。  
 京都府与謝郡与謝野町明石 地下の大石の下から出土したとされるが、梅原末治は故意の埋没とすることに慎重<sup>14)</sup>。

これらを見ると、大半が埋納か支石墓や石棺のようなものか不明であるため埋納と断定しがたいが、巨石の足下に納める例は広島、石を積んだ下に納めるのは香川に多く見られる。銅鐸と磐座を結びつけて考える意見も散見するものの、瀬戸内地域を除けばけて普遍的とは言いがたい。加茂岩倉遺跡発見時にも付近の巨岩が注目されたが、肝心の銅鐸出土地点には巨岩がない。滋賀県大岩山も同様である。巨岩に納められた兵庫県気比銅鐸も近年では後世の再埋納とみられる。巨石の下に納める例が扁平鈕式までで突線鈕式にはみられないことも、巨石下への埋納に限られた地域での古い青銅器祭祀の方法だったことを推察させる。

また赤色顔料の付着がみられるものもいくつかある。朱のついていたものは徳島県名東鐸（扁平鈕式）、徳島県長者ヶ原1号鐸（扁平鈕式）、徳島県源田3号鐸（扁平鈕式）、島根県加茂岩倉10号鐸（扁平鈕式）、同33号鐸（外縁付鈕式）、岡山県明見鐸（扁平鈕式）、島根県荒神谷遺跡中細形c銅剣8口にみられ、ベンガラがついていたものは兵庫県桜ヶ丘8号鐸・11号鐸・14号鐸（扁平鈕式）、12号鐸（外縁付鈕2式）、奈良県大福鐸（突線鈕1式）が確認されているという。例は少ないが、朱の塗布は中国四国地方から瀬戸内西部にかけて扁平鈕式段階で散発的にみられる。ベンガラ塗布は桜ヶ丘と大福例があり、扁平鈕式の前後に限られる。その頃に一部の銅鐸で赤く塗る行為が行われたといえる。いずれも複数出土銅鐸の全てに朱がついているわけではないので、埋納時に塗られたものではなく、製作時か使用しているある時点で塗られたものであろう。名東遺跡、加茂岩倉遺跡や大福遺跡のように、発掘調査で出土あるいは出土直後に専門家による観察とクリーニングが行われた銅鐸であっても銅鐸全体が真っ赤な状況ではなかったことから、埋まっている間に流失することもあるだろうが、埋納時点ですでに赤色顔料がかなり落ちていた可能性もあるのではないかと推察される。

### 3 考察

以上の事例を手がかりに、いくつか考えられることを述べてみたい。資料の搜索と検証が不十分であることを認めるが、予察としておおよその傾向をつかむこととする。

まず武器形青銅器の埋納例（表1）について、細形銅剣の埋納例は大分、愛媛、徳島などに少数あるが、北部九州の中心地域にはみられない。中細形段階まで含めても福岡・佐賀・長崎では銅剣の確実な埋納例自体が乏しく、島根・広島・香川・徳島などの中国四国地方で確実な埋納例が多くあることと対照的といえる。銅戈は中細形から中広形にかけて福岡県下で多数の埋納例があり、むしろそのほとんどが福岡県に集中するようにみえる。対して銅矛では全体に中細形の埋納例は少なく、中広形、広形と次第に埋納が増える。そして広形銅矛の埋納はほとんど福岡・佐賀・対馬に集中し、高知に少数みられる。中細形・中広形銅矛がみられた中国四国地方に広形銅矛がほとんど見られないことも特徴的である。また銅剣埋納は、北部九州の福岡・佐賀では全くといってよいほど、一貫してみられない。

副葬例について数えてみると（表2）、福岡・佐賀では銅剣・銅矛・銅戈いずれも細形・

中細形段階で盛んに副葬されている。埋納がみられないことと対照的である。それが中細形から埋納がはじまり、中広形、広形と銅矛・銅戈の埋納が盛んになることと入れ替わるよう

	細形	中細形	中広形	平形	広形	その他
福岡	剣					1
	矛		3		23	
	戈	32	11		1	
佐賀	剣					
	矛		1		12	
	戈		1			
対馬	剣					1
	矛		14		18	
	戈					
長崎	剣					
	矛					
	戈					
熊本	剣					
	矛		4			
	戈					
大分	剣	1	4			
	矛			7		
	戈					
島根	剣		364			
	矛		2	14		
	戈					
広島	剣		1			
	矛					
	戈		1			
山口	剣	2				
	矛			1		
	戈					
岡山	剣				5	
	矛					
	戈					
香川	剣		5		6	
	矛		1			
	戈					
愛媛	剣	7			7	
	矛					
	戈					
高知	剣					
	矛			2	4	
	戈					
徳島	剣	1				
	矛					
	戈					

表1 埋納例

	細形	中細形	中広形	平形	広形	その他
福岡	剣	43	5			3
	矛	14	6			
	戈	9	10			
佐賀	剣	31	5			1
	矛	8	3			
	戈	6	1			
対馬	剣	5				
	矛		1	1		9
	戈	1				
長崎 (対馬 以外)	剣	2				3
	矛		2			
	戈					
熊本	剣	1				
	矛					
	戈	1		1		
大分	剣	2				
	矛		1	1		
	戈	1	1	1		2
島根	剣					
	矛					
	戈					
鳥取	剣		4			
	矛					
	戈					
山口	剣	2				
	矛			1		
	戈					
岡山	剣					
	矛					
	戈					
香川	剣					
	矛					
	戈					
愛媛	剣					
	矛					
	戈					
高知	剣					
	矛					
	戈					
徳島	剣					
	矛					
	戈					

表2 副葬例

に、中広形以降は福岡・佐賀に武器形青銅器の副葬が全くみられなくなる。そして銅剣は埋納にも副葬にも使用されなくなる。銅剣については北部九州での副葬が終焉した後は九州でほとんどみられなくなり、中細形c類が山陰地方、平形が瀬戸内地方で埋納に使用されるため、分布域を移動させる。銅矛・銅戈の埋納は島根の荒神谷遺跡と大阪湾型を除けば北部九

州に中心があり、福岡・佐賀で広形まで盛んに埋納される。一方の中国・四国では細形段階から埋納があるが、副葬はほとんどない。中細形・中広形段階で青銅器祭祀がほぼ終焉したと考えてよい。

これらから考えると、細形の武器形青銅器の埋納は中国四国地方がもっとも早く、中細形になると北部九州でも埋納がみられるが戈が先行し、矛はむしろ中広形から盛んになり特に広形で多数が福岡・佐賀・対馬に集中的に埋納される。一方、中国四国地方では山陰の中細形c類銅剣と瀬戸内の平形銅剣が埋納に供されるが、中広形段階までではほぼ埋納が終焉となる、という大まかな流れが考えられる。

次に銅鐸を考えてみよう。

近年の発掘調査例からすると、扁平鈕式から突線鈕式のはじめにかけての銅鐸に関して、埋納にあたっては共通の手法がとられていることが看取される。すなわち銅鐸が収まる土坑を掘り、土坑底に銅鐸を置く基盤であるかのような置き土をし、銅鐸を横位・緒上下の状態で見え隠れするというものである。

ところですでに知られていることだが、銅鐸が副葬されたものは皆無である。そのことと武器形青銅器の副葬・埋納を考えると、銅鐸が発達したこともまた北部九州において起こった事象とは考えがたい。もし北部九州で銅鐸が発達したなら、きっと副葬品になったであろうからである。もっとも古い菱環鈕式銅鐸の半数が中国四国から瀬戸内にかけて、銅鐸分布範囲内での西側にあることから、最初に銅鐸祭祀をはじめたのもその周辺という可能性がある。北部九州で製作している福田型銅鐸は扁平鈕式段階と考えられており、北部九州での使用が限定的であることを鑑みれば、九州産の銅鐸は東方への交易品のような位置づけだった可能性もあろう。

扁平鈕式以前の銅鐸と武器形青銅器はしばしば共伴している。これまで銅鐸と銅矛の対立といった文脈で分析されることは多々あったが、祭祀の意味を考えるうえで両者が共伴することの重要性をあらためて考慮したい。たとえば次のようなことが問題になる。桜ヶ丘の絵画銅鐸は著名であり、同類の銅鐸絵画と合わせて小林行雄の農耕賛歌としての解釈は著名である。そこから銅鐸祭祀もまた農耕儀礼に関わるとされる。一方、銅矛は航海民の祭祀と関わるという説がある。では、銅鐸と銅剣あるいは銅戈が共伴していることはどう解釈されるであろうか。桜ヶ丘では農耕賛歌の絵画が表された銅鐸と、銅戈が一括埋納されていた。荒神谷遺跡では農耕祭祀の銅鐸と、航海民の祭祀の銅矛が一括埋納され、銅剣が近接埋納されていた。単独埋納は農耕祭祀や航海民の祭祀で、集積されているものはそういった祭祀ではない、という解釈は一案である。大岩山や桜ヶ丘のような多数埋納の銅鐸について、集落が統合されて地的宗儀から天的宗儀に変わり、古墳時代が始まるときに銅鐸が一斉に廃棄されたというような考え方はそれにあたらう<sup>15)</sup>。岩永省三や寺沢薫は青銅器埋納の目的や契機は一つではないと考えている。かつて森本六爾は、多鈕細文鏡が山口県で銅剣と、奈良県で銅鐸と共伴したことから、銅剣と銅鐸が「異質の文化現象ではないことを示している」と考えている<sup>16)</sup>。森本の論旨は銅剣と銅鐸が同一文化の段階を異にする現象とみるので現在ではしたがえないが、武器形青銅器と銅鐸の共伴は重要な要素であるし、多鈕細文鏡は森本が言うように青銅器の解明上重要な遺物といえよう。埋納の理由はおくとしても、やはり銅鐸祭祀と武器形青銅器の祭祀はその内容についてもなんらかの共通性があつたと考えるのが妥当ではないだろうか。まったく性格の異なる祭祀に関わる道具であつたならば、一括で埋

納されているのは違和感がある。

次に、青銅器の儀器化と埋納のはじまりについて考えてみたい。

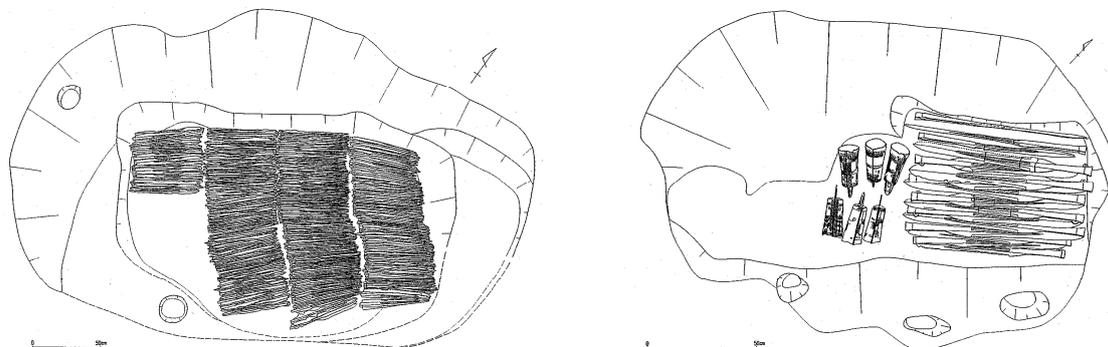


図2 荒神谷遺跡 銅剣埋納坑（左）と銅鐸・銅矛埋納坑

実用の道具が次第に機能性を失い、儀礼用模造品になっていく変化を儀器化と呼ぼう。

朝鮮半島で製作された武器と小銅鐸が日本にもたらされ、日本で儀器化したとの理解は定説である。細形は実用段階で、中細形以降に儀器化が進むとされる。では、どのような理由や経緯で儀器化が進行したのかとなると、あまり研究は多くないらしい。そのような中で、岩永省三が諸説を検討したうえで武器形青銅器を中心として儀器化の進行について論じている<sup>17)</sup>。この中に重要な指摘がいくつもあるが、本稿に関わるところだけ要約すると以下の点があげられる。

「西部地域」（北部九州地方および中国地方西端部）において細形段階では個人墓へ副葬されており、埋納例は知られていない。つまり属人的性格が強く、共同体が共有する祭器とはみえない。中細形成立後に埋納も始まるが、有力人物への副葬が根強く残る。中広形以後は副葬が減少するが、中細形では副葬と埋納は半々である。すなわち西部地域ではもともと属人的な副葬品であり、儀器化がはじまった後も共有の祭器としての性格だけではなく古い性格を温存している。このような有力者集団のいる地域を起点として祭器化が始まったとは考えにくい。鉄製武器が副葬されるようになって、青銅製武器は副葬品から脱落していった。一方、「東部地域」（中国・四国・近畿地方）において、武器形青銅器は細形段階からすでに埋納されている。「西部地域」と対照的に副葬例はほとんどない。以後、一貫して埋納に供された。すなわち、当初から属人的性格が無く、最初から集団祭祀の道具だったとみられる。また、中細形銅剣 a 類が「東部地域」で作られ始めたのと同じ頃に「西部地域」でも作られ始めているが、福岡県ではほとんど発見されておらず、大半が東部地域で発見されている。そこから交易品として製作された可能性を考える<sup>18)</sup>。埋納例をみると中細形 a b 類の矛・戈は北部九州の中心部にはみられず、周辺部にある。

これらを総合的に判断し、岩永は「西部地域」の中心部では武器形青銅器の属人性が強いために集団祭祀のための祭器化が抑制されており、祭器としての取り扱い是非中心地域で始まったとみる。中細形の武器形青銅器が、当初は中心地域から非中心地域への交易品であり、祭器としての扱いは製品を受け入れた側の事情に基づくと考えたのである。

このような岩永の分析は非常に重要であり、私も賛同する。一見すると、有力首長への副葬品にされる貴重な青銅器だからこそ神への奉獻品などにもなりえるので、祭器化が「西部

地域」で始まった可能性も否定できない気がする。しかし、「西部地域」での祭器化の開始は副葬されている細形ではなく、中細形からとなる。対して「東部地域」では、当初の細形段階から一貫して祭器として扱っており、「西部地域」との時間差が整合的に説明しがたい。

「西部地域」での武器形青銅器の扱いは当初は副葬、やがて副葬と埋納、埋納のみへと変化することは明らかであるので、祭器化は「西部地域」の中心地域ではないところから始まったと考えるのは妥当である。

もう一つの考え方として、北部九州の中心地域で副葬品から武器形青銅器が脱落し、そのために祭器化して埋納品として生き残ったとも考える。宮井善郎<sup>19)</sup>は中期後半の第二の画期に前漢鏡などの流入と鉄製武器の副葬増加によって青銅製武器の副葬が衰退し、この時期を境に銅矛や銅戈は祭器として埋納されるようになり、銅剣は使用が終わったとみる。しかしながら宮井も述べるように、「東部地域」では細形段階から埋納が行われており、そのことは無視できないので、「西部地域」で自発的に埋納が始まったとは考えにくい。また、多鈕細文鏡も「西部地域」ではほとんどが副葬品だが、「東部地域」では奈良県長柄のように銅鐸と一緒に埋納されているなど、おなじ青銅器でも「東部地域」では共同祭祀の道具として受容する傾向が見受けられる<sup>20)</sup>。したがってやはり「西部地域」中心部ではなくその外で祭器化が始まったと考えるほうが自然であり、副葬品から外れたために祭器化したという経過はたどっていないであろう。

簡単にまとめると、青銅製武器が半島から導入されたとき「西部地域」では有力首長のための属人的な副葬品であり、「東部地域」では当初から集団祭祀の具として少数の青銅製武器が埋納に用いられた。細形段階の青銅製武器は大半が「西部地域」にあり、「東部地域」は少数を入手しているにすぎないことは注意したい。そして中細形段階に、「東部地域」での祭器化するかわち集団祭祀としての埋納が「西部地域」中心部へ導入され、副葬から埋納への転換がおこる。導入された理由は想像するしかないが、岩永がいうように中細形段階で東方への交易品として製作された武器形青銅器の使用 방법이、「西部地域」に逆移入されたと考えるのが理解しやすい。北部九州地域の文化的地盤沈下によって東方の影響が押し寄せたという側面もある<sup>21)</sup>。対馬には埋納が伝播した後も副葬はなくなり、型式変化した青銅器は搬入され続けたが、最後まで副葬品であり続けた。これは朝鮮半島でも同様であり、金海良洞里古墳群にみられるように中広形・広形銅矛の副葬がある。有力者の属人的宝器としての、武器形青銅器の古い性格が最期まで残ったといえよう。それらを除けば、埋納は各地で盛行し、福岡・佐賀では戈、そして矛を用いて広形段階まで存続する。山陰では中細形c類銅剣が盛行し、その後終焉した。瀬戸内の平形銅剣も同様である。

武器形青銅器の埋納方法は、鋒を揃えたり交互に配置するなどの細かい違いはあるが、種類や時期にかかわらず刃を立てるものが多いことは留意しておきたい。

吉田広<sup>22)</sup>は讃岐西部の青銅器祭祀を検討して、「青銅器を受容した側が、埋納に際して多様な選択を行っており、したがって、執行された祭祀行為も、受容地域側の意図に即した行為と類推される」とする。青銅器祭祀が製作中心地の強い意向を受けた祭祀ではなく、各地で多様なあり方を許容されていたという点は重要である。岩永の説とあわせ考えると、東部地域が自らの意図によって青銅器埋納をはじめたと考えることに不都合はない。

では、目を東へ転じて銅鐸について考えてみよう。

銅鐸に特徴的である横位・鱗上下<sup>23)</sup>の埋置方法は、近年の発掘調査例でも大半がその状

態であることから、かなり普及した方法だったとみてよい。確実な調査例が少ない中で限られた資料をあえて分析してみると、近畿式・三遠式は9例と5例以上が横位・鱗上下であり、基本的に横位・鱗上下で埋置されたといえよう。大岩山のような多数出土例の状況がわからないのは残念だが、入れ子であることは記録されており、おそらく横位・鱗上下と推測される。静岡県木船1・2号鐸（突線鈕3式三遠式）は鱗水平で並列、静岡県敷地1・2号鐸（突線鈕3式三遠式）は鱗水平で上下2口積み重なってあったとされるが、いずれも発見後かなりたってからの聞き取りであり評価が難しい。遠江では鱗水平の埋納があった可能性もあるが、遠江の近畿式・三遠式の中でも例外的であり、大半が横位・鱗上下である。

突線鈕式1・2式段階でも判明している大半が横位・鱗上下である。わずかに岡山県妹鐸は鱗水平の可能性が言われている<sup>24)</sup>。基本的に、突線鈕式古段階以降は横位・鱗上下以外の埋置状態がほとんどみられないといえよう。いっぽう、扁平鈕式では横位・鱗上下が8例以上ある<sup>25)</sup>のに対し、その他の埋置方法も5例ある。確実な外縁付鈕式の横位・鱗上下のひとつである荒神谷遺跡の銅鐸は中広形銅矛と共伴しており、時期的には扁平鈕式とおなじころかそれ以降に埋納された可能性がある。とすれば、外縁付鈕式では横位・鱗上下もあるが、その他の埋置方法のほうが多い。

概略的にまとめると、外縁付鈕式段階までは多様な埋納方法があり、扁平鈕式段階に横位・鱗上下が広まり、突線鈕式段階ではほぼ全て横位・鱗上下で埋納された、という見通しが立つ。

次に考えるべき点は、外縁付鈕式・扁平鈕式段階で銅鐸を埋納していた状況である。東海地方の愛知県八王子遺跡は外縁付鈕式銅鐸を倒立で埋納していた例で銅鐸単独であるが、ふたたび目を西の方へ戻してみると、中国四国地方から瀬戸内では武器形青銅器と銅鐸がともに使用されていた。荒神谷遺跡では武器形青銅器は刃を立て、銅鐸は横位・鱗上下だが、おなじ出雲でも志谷奥遺跡では銅鐸は倒立と正立に近い状態で、銅剣は荒神谷と同じ型式だがこれも鋒を下にして埋納坑に立てかけるようにおかれていた。外縁付鈕式、扁平鈕式段階では埋置方法に多様性があるという先の指摘のとおり、おなじ出雲でも埋めかたが異なっている。志谷奥遺跡の埋置状態は徳島県源田遺跡などと類似性があるようにみえる一方で、荒神谷遺跡の整然とした埋置状態はより新しい段階の近畿式・三遠式につながる横位・鱗上下での埋置である点に関心をひく。

そこで私が考える仮説は、次のようなものである。古い段階の銅鐸は多様な埋納方法だった。中国四国地方では細形段階から武器形青銅器の埋納が行われ、銅鐸も埋納された。銅鐸の埋納がいつ始まったかはよくわからず、荒神谷遺跡で菱環鈕式・外縁付鈕式が中広形銅矛と共伴しているところからすると、長期間使用されていた銅鐸が中期後半ころに銅矛などと一緒に埋納されるようになった可能性もあろう。ともかく、北部九州から瀬戸内、近畿まで広範囲で青銅器埋納祭祀が盛行する中期後半ころに、中国四国地方から瀬戸内にかけては銅鐸と武器形青銅器が一括で埋められている。そうした祭祀を行う中で、武器形青銅器に適した埋納状態である、横倒しで刃を立てる方法が銅鐸にも適用されたのではないかと推測するのである。

これは論証することが中々に難しい仮説である。しかし、もっとも端的に表れているのが島根県荒神谷遺跡の銅矛・銅鐸埋納坑であろう。銅矛は通有の刃を立てる埋めかたである。銅鐸も横位で、鱗を上下に立てる状態で置かれている。しかしながら、銅矛の状態に比べて、

銅鐸をそのような状態で安置することは著しく不自然である。銅鐸と銅矛を一括して埋納するにあたり、整然と納めるために武器形青銅器と同様の、横倒して側面を立てる状態が選択されたのではないかと考えたい。もちろん荒神谷からそのやり方が始まったというつもりは毛頭ないが、横位で側面を立てるという点において武器形青銅器と銅鐸の埋置状態に強い共通性がある以上、銅鐸しか埋納しない東海地方などの地域でこのような埋納方法をやりはじめの理由は考えがたく、やはり銅鐸と武器形青銅器を併用していた中国四国地域に淵源をもとめたい。そして銅鐸祭祀の盛行範囲が近畿・東海へと移動していくと、青銅器の構成から武器形青銅器が抜け落ち、銅鐸だけが大型化して生き残るが、埋置方法は横位・鰭上下という不自然な作法が伝承されたのだと考えられる。それが定式化し、近畿式・三遠式ではほぼ例外なく、単独埋納でも複数埋納でも、横位・鰭上下の埋置状態をとる。すなわち、遠江で近畿式でも三遠式でも突線鈕式銅鐸を横位・鰭上下で埋置しているのは、西方で青銅器埋納祭祀において採られていた武器形青銅器埋納方法の名残とみるのである。

#### まとめ

以上、雑ばくな議論をしてきた。資料は今回十分確認できなかったものがあり、先行研究の調査も不十分であろう。

銅鐸研究を見てしばしば思うのは、近畿式・三遠式のイメージが強すぎるのかもしれないが、なぜか武器形青銅器との一体的な解釈があまりなされていないことである。しかし外縁付鈕式・扁平鈕式段階での中国四国地方の状況からすれば、もともと銅鐸と武器形青銅器は一括して祭祀に供されてもおかしくないものだったと言えるし、それが本来の姿なのかもしれない。埋納が北部九州ではなくそれより東で始まった可能性を考えると、銅鐸埋納と武器形青銅器埋納は強く密接な関係にある。

これまでも武器形青銅器の分布圏と銅鐸の分布圏が各型式ごとに変化していく様は図化されてきたが、中国四国は武器形青銅器祭祀と銅鐸祭祀が重複する地域、という評価が多かったように思う。しかし武器形青銅器と銅鐸は相容れないものではなく、島根県荒神谷・広島県木ノ宗山・徳島県源田・兵庫県桜ヶ丘といった実例が証明するとおり、一括して埋納できる道具であり、祭祀もそのような性格のものだった。武器形青銅器祭祀と銅鐸祭祀の二種類を執行していたわけではなく、武器形青銅器も銅鐸も使える祭祀を行っていたのである。

銅鐸の埋納方法に関しても、横位・鰭上下の埋置状態についてさまざまな宗教的解釈を考察することも大事だが、そもそも銅鐸祭祀のために考案された埋めかたなのか、本稿で提示したように武器形青銅器埋納方法の影響とみるのか、それによって意義付けも大きく変わってくるかもしれない。

銅鐸や武器形青銅器にどれほど政治性を強く想定するかによっても、その意義付けは大きく異なってくる。また銅矛分布圏を一つの連合体のようなイメージでとらえるのか、武末純一が銅矛埋納方法から4地域に区分できるとしたイメージでとらえるのかによっても違ってくる。銅鐸分布圏も同様で、畿内大社会というイメージなのか、各地が分かれているイメージなのか、あるいは近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の分布の差を政治的対立と読み解くのかどうかによって、描き出される弥生社会はかなり異なってくる。

今回は資料的制約もあって小地域ごとの差については検討できなかった。また武器形青銅器の木製・石製模造品との関係についても同様である。本研究は依然道半ばの感があるが、

現時点での筆者の考えをまとめてみたところであり、今後さらに分析をすすめたい。

図出典

図1 小郡市教委『寺福童遺跡銅戈埋納遺構』2008、浜松市博物館『都田地区発掘調査報告書』1990。

図2 島根県教育委員会・島根県古代文化センター『出雲神庭荒神谷遺跡』1996。

注

- 1) 岩永省三『歴史発掘7 金属器登場』1997,講談社,pp.59-62。
- 2) 寺沢薫「銅鐸埋納論」上下,『古代文化』44・5・6,pp.266-281,334-348。
- 3) 森岡秀人も大量埋納の2段階説を採るが、同時にそれでは横位・鱗上下の埋納方法が長期間広範囲に一定していることが説明できず、単独少数の埋納は順次進行したとみる。  
森岡秀人「銅鐸の埋納行為と弥生人」『季刊考古学』86,雄山閣,2004,pp.63-66。
- 4) 寺沢薫『日本の歴史02 王権誕生』,講談社学術文庫,2008(初版2000)。
- 5) 吉田広「善通寺市与北町陣山出土銅剣とその埋納状態」『香川考古』8,2001,pp.1-17。
- 6) 石川日出志『農耕社会の成立』,岩波新書,2010。
- 7) 資料の多くは島根県教育委員会・島根県古代文化センター「銅鐸・武器形青銅器出土地名表」『出雲神庭荒神谷遺跡』,1996に拠る。そのほか発掘調査報告書、図録などの類を適宜参照した。
- 8) 小郡市教委『寺福童遺跡銅戈埋納遺構』2008,p.59。
- 9) (財)八尾市文化財調査研究会『銅鐸講演会記録集』1991,p.5。  
確かに木の宗山の巨石は遠方から見はるかすことができるランドマークだが、およそ海から見えない地点に埋納された銅鐸も少なくない。農耕のまつりと航海のまつりがあったとしても、結局どの埋納を航海の祭祀として理解することができるかが課題であろう。
- 10) 萩原儀征「大福遺跡の出土銅鐸」(財)八尾市文化財調査研究会『銅鐸講演会記録集』1991,pp.25-38。
- 11) 神田孝平「銅鐸出處考」『東京人類學會雑誌』第3巻第25号,東京人類學會,1888,pp.144-149。
- 12) 平野和男・向坂鋼二「静岡県引佐郡三ヶ日町猪久保出土の銅鐸について」『考古学雑誌』51-1,1965,pp.60-67。
- 13) 梅原末治『銅鐸の研究』増補版,木耳社,1985,p.166。
- 14) 梅原末治『銅鐸の研究』増補版,木耳社,1985,p.234。
- 15) たとえば田中琢「「まつり」から「まつりごと」へ」がある。
- 16) 森本六爾「日本に於ける青銅器文化の伝播」『論集日本文化の起源』1,平凡社,1971(論文初出1931)。
- 17) 岩永省三「青銅武器形祭器生成考序説」『日本民族・文化の生成』1,永井昌文教授退官記念論文集刊行会,1988。
- 18) 製作地に出土例が乏しく、周辺地域に多いという点は銅鐸を考えるうえでも参考になる。新しい近畿式銅鐸が畿内中心部にみられず、東海地方の三遠式でも同様であることはこれまでも言われて来たことである。もっとも近畿地方では滋賀県下々塚遺跡などで大型銅鐸の鋳型とみられる遺物があり、製作地そのものが中心部になかった可能性もある。
- 19) 宮井善郎「銅剣」『季刊考古学』第27号,1989,pp.28-31。
- 20) その理由には社会構造の差などの要因があるだろうが、ここでは立ち入らない。
- 21) 岩永省三『歴史発掘7 金属器登場』1997,講談社,p.58。
- 22) 吉田広「武器形青銅器の祭祀」『季刊考古学』86,雄山閣,2004,pp.54-58。
- 23) 大阪府西浦銅鐸のように鱗が垂直ではなく多少斜めに傾いているものも鱗上下に含む。

- 24) 梅原末治『銅鐸の研究』増補版,木目社,1985,p.292 補注。
- 25) ここでの埋置方法のカウントは複数型式一括出土の場合は最新式のものに1を数えた。またたとえば神於銅鐸の「横に倒れて埋もれてあった」という程度の報告(梅原末治『銅鐸の研究』増補版,1985)だけがあるものは除外している。古段階の小型銅鐸では出土状況が判然としないものが多く、新段階の大型のものでは横倒しだったという証言が多いように思われる。全般に聞き取りによる出土状況の細部は信憑性の評価が難しい。